



認知症とともに

秋雨の日は肌寒く思われるこのごろの陽気ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年は、異例の高温が続いた影響で、紅葉の色づきは北日本や東日本を中心に、平年並みか平年よりも遅くなるとの予想が出ております。日本の特徴である季節感を皆様と楽しんでまいりたいと思います。

シャローム横浜では、様々な学校からの実習生を受け入れています。看護師・社会福祉士・教員等の資格取得を目的とした実習から、中高生による体験学習まで、実習の目的は様々です。

ほとんどの実習生は、介護が必要な高齢者と接することが初めてなので、とりわけ認知症を患っているご利用者との接し方に悩んでいる姿をよくみかけます。しかし、そうした関わりの中で認知症を理解し、感情の交流を体験することで成長していく姿には、日々頼もしさを感じています。

9月28日の朝日新聞朝刊に、「最期まで人と絆 私を支えられ」とのタイトルで精神科医・長谷川和夫先生の娘である南高まりさんの記事が紹介されていました。そこには、父が自ら認知症を公表

してから、いままで築いてきた人間関係の中で絆を切られてしまうことがあり、「認知症になって困るのは、人との関わりがうまくいかなくなること」と述べていました。

しかし、「最期まで人との絆を結び、深い話を楽しみたいと感じることが出来る。認知症になったら何もわからないなんてでもない」と、父との関わりの中で感じ、自分自身が父に支えられていたと気づかされたとありました。

現在、認知症の方の人口が約700万人と、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症と見込まれています。もはや認知症は誰でもなり得る可能性のある時代です。

他人ごとではないこと、認知症になっても自分自身を「ありのまま」受け止めて、「自分にできることをしながら後は運命に任せ、今を生きる。大事な今は今を生きる」と。

長谷川和夫先生のこの生き方を参考に、今後も私事として認知症を捉え、ご利用者の皆様との感情の交流を今後も大切にしていきたいと思えます。

施設長 高原 信夫

感謝の気持ちを込めて

デイサービスでは9月15日から9月17日までの3日間、毎年恒例の敬老のお祝いをしました。今年もお祝いのカードをプレゼント。みなさま、とても素敵な笑顔です。



この3日間はデイサービスの職員が準備したお赤飯（白米で簡単に作れるものです）を召し上がっていただいたのですが、みなさんお赤飯がお好きな様でペロリと完食されました。

これからもみなさまと一緒に過ごす時間を楽しみにしております。

デイサービス主任 木下 順子

第 303 号

令和7年 10月 15日 発行

（毎月1回 15日 発行）

責任者：施設長 高原 信夫

〒241-0802

横浜市旭区上川井町 1988

社会福祉法人アドベントスト福祉会

シャローム横浜

☎045-922-7333

編集委員 荒金・石川・石橋

[https://www.adventist-](https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/)

[welfare.jp/yokohama/](https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/)



マ ス ク が 当 た り 前 の 時 代



今年の夏、軽井沢で
自然を満喫しました

施設での面会もだんだんと以前の姿に戻りつつあります。まだまだ制限はあるものの予約なくご来館の受け入れができ、本当に良かったと感じております。一時期はご家族であるにもかかわらず短い制限時間、アクリルボード越し、さすることも、手に触れることも許されない、歌も歌ってはいけません。集団生活を守るためであったとはいえ多大なご迷惑をおかけしたと思っております。依然として医療関係ではマスクの着用が推奨されております。お顔がよく見えない。コロナ前まではご利用者にマスクで接するのは失礼だと言われたことが遠い昔のようです。

マスクを外すと、人の表情が明るく見え、気持ちも豊かになります。医療、施設従事者のマスクが当たり前という時代が早く過ぎ去って欲しいものです。

ケアマネージャー 富桝 建美

ラ ー メ ン 屋 台

10月5日(日)は栄養課主催の行事「ラーメン屋台」を開催しました。

入居者の皆さまは久しぶりのラーメンを啜りながら、楽しく召し上がっている様子でした。

今回のラーメンは、昔懐かしい醤油ラーメンをイメージして、担当の大久保職員が考案したものです。

11月の行事食はお休みいたしますが、12月はクリスマスディナーを予定しております。入居者の皆さまも楽しみにしてください。

栄養課 廣澤 美貴



ま ず 神 の 国 と 神 の 義 と を 求 め よ

第211回 チャプレン 上前 至

9月末、久しぶりに私たちと同じアドベンチスト福祉会に属する沖縄の障がい児通所支援事業「ベートルの夢」、「ベートルの夢Ⅱ」を訪ねた。羽田空港を立つ時は少し涼しかったが沖縄の那覇空港に着くとさすが暑さを感じた。その日は曇りであったが、雲の間から漏れてくる太陽の日差しの強さに痛さを感じるくらい本土との違いを感じさせられた。今回、訪れて特に感じた違いは沖縄地域のあちこちで工事がなされており、かつての日本本土での高度成長期の開発成長の時代を想い起こさせるくらい、様々な工事がなされている事であった。

こうした中において社会福祉の必要、特に沖縄における児童支援の必要性はとても重要な働きであると感じさせられるのである。今回は夏休みが終わり、学校の時間も変わったことから子どもたちに会えずじまいで終わったが、スタッフの方達との貴

重な交わりの時をもたせていただいた事を感謝したい。このことを通し私たちのアドベンチスト福祉会には高齢者部門だけではなく、こうした児童支援の分野もあることを改めて思い起こされ、その分野に携わらせていただいている事を感謝したいし、大切にしていきたいと改めて感じさせられた次第でもある。

そのためにも、まず私たちが覚えなければならない事が次の聖句の中にあることを心に留めたい。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、全て添えて与えられるであろう」(マタイ6章33節)。私達の事業において大切な精神、即ち「まず神の国と神の義とを求めよ」その逆ではない事を常に覚えるものでありたい。

